

秋の沢集中

## 中ア・中田切川本谷

メンバー:三井(主、記録)志満、西村、  
後藤

遡行日:2010年9月19日~20日

当初予定の「中山沢」は、アプローチに時間が掛かりすぎる事がわかり、急遽、「中田切川本谷」に変更となった。

中田切川本谷は以前所属していた会で2度行った事があった。(20年も前の事になるが。)

ただ、最初に行った時はまだ時期が早くて上部は殆ど雪雲歩きであったし、2度目の時は大雨にやられ、枝沢から支尾根を越えて空木岳の避難小屋にエスケープして下山という有様だった。今回、中田切川本谷を遡行する事になり三度目の正直、これで源頭まですっきりとした山行が出来るな、と寧ろ変更は歓迎すべき出来事だったかもしれない、と思った。

\* \* \* \*

駒ヶ根ICで高速道を降り、前泊予定地の古城公園に向かう。

暫しウロウロとしたが何とか捜し当て、早速テントを張り、飲み始めていると車が入ってきた。

小荒井沢に入る糸井、平本Pの車だった。その糸井Pも交えて入山祝いをして仮眠。

翌朝僕の勘違いで空木岳の登山口まで行ってしまふ、などとつまらないロスタイムをだしたものの本来の林道に入り、ゲート前に車をとめスタート。

林道を少し歩き、工事中の巨大堰堤の先から入渓する。直に左岸に取水口が

あり、「荒井沢」を分ける。本流は平瀬の河原となっている。黙々と河原を遡って行くと先行していた糸井、平本Pに追いつき、何となく合同パーティーのような感じで進んで行く。

間もなくゴルジュとなり、その中に「煙りの滝」がある。意味ありげな名前がついているが別にどうという事もない滝だ。

直登は出来ないの、右岸から小さく巻くとまた河原歩き。河原といっても大きな石がゴロゴロとしていて歩き辛い。ただ我慢して歩いて行く。

程なくして左岸に「小荒井沢」の出合いを迎える。糸井・平本Pとはここで別れ。明日の再会を約して僕たちは本流を進む。

間もなく前方に大きな直瀑が現れる。「燕滝」20mだ。右岸の脆いルンゼから巻くが、途中のトラバースが余り芳しくなくロープをだしたが、もう少し上から巻いた方がよかったかもね。

「燕沢」を分けるとまたまた忍耐の河原歩き。所々、岩の間から滝状に水流を落としているが大岩のゴロゴロした河原歩きは張り合いもないしんどい。

漸く溪相が変わってきて両岸が鋭く立ち上がり、狭まってゴルジュの様相を呈してきた。が、相変わらず岩が累々としている。ゴルジュの奥に滝がみえるがあれが大滝だろう。

「あの滝を越えれば、後はいい幕場を探すだけだ。時間的にも頃合だな…。」この時まではこんな事を思っていたのだが…。

大滝が迫り、5mほどの滝に行く手を塞がれる。右岸側から小さく巻こうとしたがてこ摺りそう、その手前の上部

がルンゼになっている脆そうな露岩の重なった斜面からロープを曳いて取り付く。

別に難しくはないが岩が脆いのと、高度感があるので気は抜けない。ランニングはとれない(とらない?)まま登り続け、ロープが一杯になったところでロープをフィックスして後続を上げる。登ったすぐ横のガレルンゼを下って落ち口の上にてでるが小滝があり、続けて登るとさらに大滝の落ち口に続く滝が水流を落としている。

大滝は何段かになっているようだが既に大滝に取り付いているのだろうか。その滝の左端の狭い凹角が登れそう。足をこじ入れるようにして登っていくが、上からの瀑水でたちまち全身びしょ濡れとなる。テラスまで登り、後続にロープを投げ下ろす。待っている間も寒くて震えが止まらない。

時間は容赦なく経過していき、暗くなるのも時間の問題だろう。まさか上段と下段(中段?)を繋ぐこんなところでビバーク出来るはずもなく、大滝は何としても越えるしかない。

上段は直登は無理で右岸の草付から巻く他はなさそう。西村さんがロープを曳いてその草付きに取り付くが苦戦しているようでバラバラと落石がある。

コールがあり、続いて登ると中間の岩壁に錆びたボルトがあり、そこからトラバースする一歩が際どい。

急な草付きの途中にしっかりした灌木があり、そこでピッチを切っていた。全員がそのピッチを上った時点でどっぴりと日は暮れ、ヘッドランプをつける。

この先は僕が登る。LEDのヘッドランプの光源は手近は広く照らす但先に届かないのが欠点(最近ではスポット光付のものもあるが。)で、ルートは判然としない。感を働かせつつ急な草付きをよじ登って行く。

ロープが一杯になる頃傾斜が緩み、安定したところに着く。

灌木にロープをフィックスするが、後続を待つ間、寒くてツェルトのフライを引っ張り出して被る。何処の町だろうか、明かりが綺麗で見とれていると今の状況が自分とは関係のない事のような気がする。

後藤さんの疲労が激しいようでロープで引き上げ、全員が上がったところで下降に移る。月明かりで下にうっすらと白く河原が見える。手探り状態で下降し、漸く河原に降りた。

さすがに皆に安堵感が溢れる。しかし、河原は河原、大きな石がゴロゴロして期待したようなテン場はない。

しかし、高巻きの途中でヒザ小僧を抱えてビバークする可能性もあった訳で、それを思えば文句などつけようもない。

時間は夜の9時を回っているが一度日が暮れば二度はない。時間は気にする事はない。米を炊き、食当の志満さんはタマネギを炒め始め、それに大量に持参した牛肉をぶっこんでビーフストロガノフ(でしたね。)作り。

たっぷり夕食(というより夜食。)を食べ、眠りについたのは12時を回っていた。

【二日目】

朝を迎え、出発の支度が済んだところ

で、落ち口から昨日登ったルートを覗いてみる。「あそこから巻けたかも…。」などと言ったところで今更の話。あれはあれでベストのルートだったと思うほかはない。どれだけ大変な思いをしたところでそれは直に記憶の底に沈んで薄れていくのだろう…。歩き始めると直ぐに二俣状となり、右に進むと両岸が立ったゴルジュ状になるがやはり石が堆積している。滝を2本ほど越えると左からガシた沢が合わさるが本流は右だろう。そのまま進んで行くが、辺りはガシたルンゼが分かれていて何やら源頭の雰囲気となっていて、どうも辺りの様子に疑問が湧く。途中の無線交信で、集中場所が空木岳の山頂から空木岳の避難小屋に変わって、その為には本流から枝沢に入って支尾根を越える必要があるのだが、まだ本流を詰めているはずで、枝沢に入っている事はないはずなのだが…。どうも地図と現在地が合わない。しかし、今回のメンバーは志満さんを初め、読図はきちっと出来るメンバーで、地図の見間違いはないはずだし、それにここまで見誤るような二俣もなかったと思うのだが…。この肝心な時に僕のGPSは誤作動していて、正確な現在地を表示していない。いつ枝沢に入ってしまったのだろう。どうにも腑に落ちないままその沢を詰めていくと、急なボロボロのもろいルンゼとなり枝尾根に取り付く。見上げる先に見える支尾根は明らかに空木岳から東に下っている支尾根で、右に見えるのが2676mのマイナーピークだ

ろう。釈然としないままその支尾根に向かうが、遺松を漕ぐようになると程なく支尾根上にあがる。見下ろす先に集中場所の空木岳の避難小屋が見える。

遺松を漕いで下って行くと早川君が迎えに出ていてくれた。

空木岳の避難小屋にたどり着くと、小屋前には集中の参加メンバーがニコニコ顔で出迎えてくれ、小屋の中に招き入れられると熱い飲み物が差し出され、小屋が和みの空気で満たされる。苦勞や疲れも一瞬ですつとぶ。

仲間の絆をしみじみと感じ、うれしくなる。人心地つくとお互いの山行の苦勞話が飛び交い、こんな事が「集中山行」のいいところだなと思う。

英氣と幾ばくかの活力を復活させたところでさて、下山。

結構長い池山尾根の下山路だが、話をしながら下って行けば大変さも和らぐ。ヘッドランプをつけての下山となったが、林道に下り着けば一足先に駆け下った若手によって車も回収されていて、その場で解散となった。

\* \* \* \*

私たち「中田切本谷」パーティーが集中時間から大幅に遅れ、ご心配とご迷惑をかけてしまいました。「集中」に参加したほかの2パーティーの皆さんには、心よりお詫び申し上げます。

それにしても大滝の通過にこれほどの時間を要するとは思いませんでした。

この記録の冒頭にも記したように、昔遊行しているので帰宅後、その時の記録を引っ張り出して調べてみた。

問題の大滝は大滝手前のルンゼから1時間少々で巻いていて、ご丁寧に「意外と容易な高巻きだった。」とまで書いてある。また、他会の会報やらネットで調べてみたのだがやはり1時間から2時間位で巻いている記述がみられる。

ルートは右岸の草付きからルンゼを登って小尾根の草付きを巻いて沢末に降りている様だ。

という事は僕たちが最初にロープをだして巻き始めたところは、上部はルンゼになっていたが、そこをそのままもう少し登って、上部の草付きを巻けばよかったのだろうか。

でも結果的には大滝に取り次いで、夜間登攀みたいな事になってしまったが、暫くは話の種になる山行になった事は確かだね。

それともう一点。大滝を越えてから上部で本流を見失って枝沢に入ってしまったが、これもどうしてそうなってしまったか…。上部は崩壊が進んでいてガレが酷く、その為に本流、支流がわかり辛くなっているのは確かだが。

3度目の正直で頂上までスッキリした遡行が出来るか、と思ったら逆に今まで以上にモヤモヤの残る遡行となってしまった。

このモヤモヤを解消するにはもう一度遡行して確認するしかないだろうな、と秘かに思い始めている。

\* \* \* \*

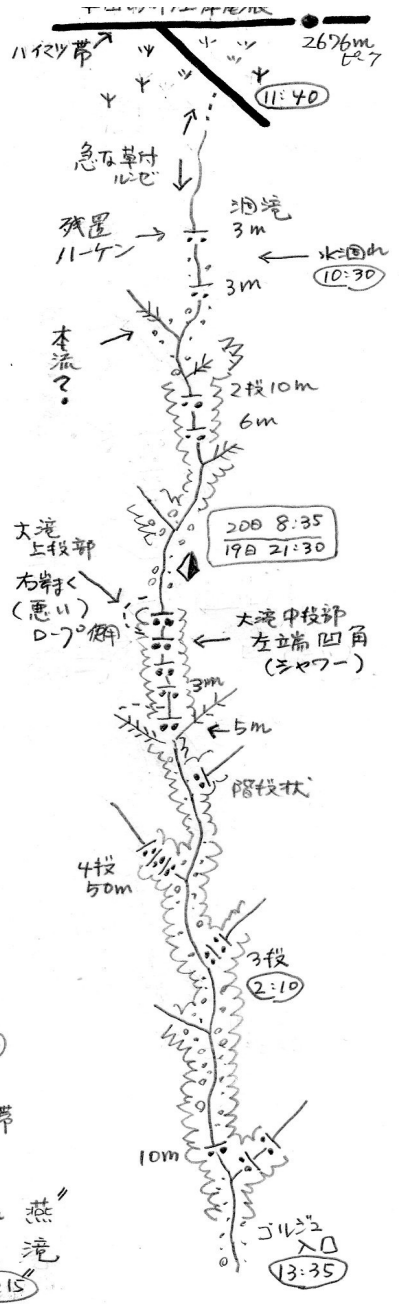
皆さんご存知のように「中田切川本谷」は“百名谷”に入っている。

しかし、遡行してみると中流部まで河原歩きが長く、上流部はガレが酷い。これで何故“百名谷”だろうか、と思わせ

られる。

ただ“百名谷”に選定された沢がその後、沢が荒れて「スカ谷」になってしまった、という例は幾つか見聞きしている。

ここもそういう事なのか、と思っていたら先の20年前の僕の遡行記録を今回読んだら同じように「百名谷なのにスカ谷っぽい。」と備考に記してあって、元々そういう沢だったんだなあ。と思った次第。



10年 9月 19日~20日  
 秋の沢集中 / 中・中田切川本谷